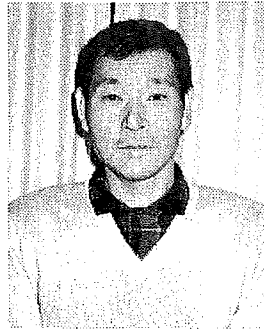


佳作 | 第一部門 |

心の杖



福島県

自営業 須田 一 輔

昭和二十五年八月、小学四年生のボクは、高熱の為にうなされながら何度も布団を蹴飛ばし大声でわめいていた。

「かあちゃん、熱いよう。苦しいよう」

心配そうにのぞき、布団を掛け直す母、まんじりともせず看病していました。次の日も次の日も熱は下がらない。辺びな山あいの村では病院に連れて行く事もできず、ただ熱の下がるのを待つだけでした。四日目ようやく下がったが、体がだるく起きられない。

「今日は、ばあちゃんの家にいこうな」

と起こされたが体がふらふらして、足にも力が入らない。

「かあちゃん、オレへんだよ。足がコタコタして立てないんだ」

「エッ、それや大変だ、悪い病気にかかっていたんだべか」

と言って母はボクを赤ちゃんみたいに背負い、泣きながら祖母のところへ走りました。蝸のようになったボクの両足をみた祖母は、

「これは小児マヒじゃないのが。前にその病気にかかった人を見たことがある」

と言った。祖母の話だとその人は、それからずっと歩けなかったそうだ。本当に大変な病気らしい。次の日祖父に背負われて病院に行くとお医者さんから、

「小児マヒです。もう手遅れで何の手当てもありません」

とはっきり言われてしまいました。

もう自分の足で歩く事ができない。ボクはこれからどうなるのだろうか、不安でいっぱいです。帰り道自転車の子しむ音だけが淋しく聞こえ、祖父の背中にはふるえていました。

それからは両手で体を引っ張るようにしか動けず、壁のシミも、天井の節穴も、風の音もみんな恐しくなって一人でいられない。自分がどうにかなくなってしまいうさだ。祖母に抱かれて寝ている時だけが安心してきたのです。

風の便りで福島の灸で良くなったと聞けばとんで行き、梁川の電気マッサージで治ったと言われれば通い、あそこの宗教で悪い虫を退治してもらったらと言われれば拝んでもらいに行くのでした。何時もボク

を背負って自転車のペダルを踏む祖父、行く時は期待を大きくふくらまして、でも帰る時は疲れ果て、あえぎながら坂道を登ります。

背中のボクは、シワの深くなった首筋と白髪の多くなった頭をみながら、おじいちゃん、勘弁してけろとつぶやくだけでした。

それまでは野山を跳びはねて遊ぶ事の好きなスポーツ少年のボクでしたが、一日中家にとじこもるようになってしまいました。自由に歩けない生活に楽しみなどありません。ふざけあって、かけ足で登校する友の声を聞くのがつらく、目も耳もふさぎました。少し前まではあれがボクの姿だったのです。でも一生歩く事も走る事もできない。そう思うともう何もかもいやになりました。ボクなんか生まれてこなかったら良かったんだ。みんなに心配や迷惑ばかりかけるので死んだ方がいいと泣いてばかりいるボクを、おばあちゃんはいやな顔もしないで抱きよせ涙を拭いてくれるのでした。

みんなの優しさが身にしみ、心が段々落ち着いてきました。そんな生活が一年も続き、やがて心に傷を持ったまま、手にはゲタ、足には短ぐつをはき、犬のようなかっこうで、学校に通うようになりました。みんな親切に迎え入れてくれましたが、中には意地悪な人もいます。ボクの真似をして歩く人や、悪口を言う人もいます。

「やい、犬は学校にこなくていいんだぞ」

「犬はしゃべんなくていい。ワンワンとほえてみる」

ボクはくちびるをきっとかみ、急いで家に帰った。家の前まで来て、今まで我慢していた涙が落ちて止

まらない。でも泣きながら帰るとおばあちゃんも悲しむだろうと思ひ、物置小屋に入って思ひ切り泣いた。泣くだけ泣いて家に入ると、おばあちゃんが、

「おそかったな。目が赤いよ」

と言ったので、ボクは、

「帰る途中でころんじやった。痛かったので泣いた」

と言ったら、

「お前は泣き虫だから、男はがまんしなくちゃな。いもゆでであるから食え」

と言って笑っていたが、おばあちゃんの目も赤かった。

夜になっていろいろ考えて、今度悪口を言ったら石をぶっつけてやろうと思ひ、石投げの練習をした。相手の足に当たるようにと、電柱に足の長さを印し、そこに向かって石を投げた。電柱は石が当たる度に傷になって行く。ある日、学校の帰りおしっこがしたくなかったので、道路脇の草むらにしゃがんでやっていたら、いじわるT君が通りかかって、

「おい、犬は片足あげてしょんべんするんだぞ。片足あげてやれ」

と言った。カッとなったボクは、そばにあった石を思い切り投げつけた。練習の時には、足に当たるように手加減してたのに石はおでこに当たってしまった。T君はあつと言っておでこに手を当て、半ベソをかいている。指の間からは赤い血が流れてきた。ボクは家に帰ってからビクビクしていた。T君の親が怒鳴り込んでくると思ったからだ。だがT君の親はこなかった。

次の日学校に行くと、T君のおでこは赤くはれあがっていた。ボクは、

「ごめん、痛かった？」

と言うと、T君は、

「いや、大丈夫」

と言った。親に黙っていたようだ。それから悪口を言う人はいたが、石を投げつける事はしなかった。いくら悪口を言われたからといっても、相手に傷をつけたのでは心が晴れない。余計に自分の心に傷がつく。電柱の傷は、ボクの心の傷だったので。

優しい人もいます。体の大きいK君は、遠足や社会見学の時等にボクをおぶって連れていってくれました。銅山見学の時も、ヘルメットをかぶってトンネルの中をおぶってくれた。デコボコの岩に、ボコボコぶっつきながら歩いてくれた。体が大きいといっても同じ学年、重かったはずなのに、ずっとおぶってくれた。K君の本当の心にくれたようでもうれしかった。

このように様々な出来事に耐えながらも、家族や友の励ましで無事に小学校を卒業する頃、民生委員の人のお世話で、県から車椅子が頂ける事になりました。通学が大変楽になり、車椅子に乗って大喜びしている姿をY新聞の全国版に紹介され、大勢の人から激励の手紙が届きました。ほとんどの人は頑張れ、頑張れの手紙でしたが、その中に宮城県の平間さんからの手紙がありました。

平間さんの手紙には、勉強しなさいと書いてありました。今の貴男には勉強が大切です。今の自分をみつめるためにも、これからの自分を考えるのにも、今のうちにしっかり勉強をやりなさい。勉強の役に立

つように毎月本を送りますと書いてあり、それから三年間、手紙と本を送り続けて頂いたのです。

手紙には、人の生き方や考え方が書いてありました。ボクも自分の悩みを訴えました。失った足のためにできなくなった事、悪口や陰口をたたかれる事、人に迷惑ばかりかけている事、だから生きて行く価値のない人間である事等、愚痴ばかり書き並べました。

平間さんからの手紙には、失った足よりも手があり、目があり耳がある事をみつめて、そこから何ができるかを考えなさい。世の中には、もっと多くの物を失った人がいて、その人も自分のできる事をみつめて精一杯生きています。障害を持っているからといって、甘えてはいけなし、憶病になってもいけない。できない事を数えないで、できる事を一つ一つふやさない。そして自信を持ちなさいと書かれていて、おおいに勇気づけられ、頑張るのです。でも、しばらくするとまた友のやっている事が羨ましくなり、自分もあんな事がやりたい、こんな事がしたかったと手紙に書くのです。

平間さんからの手紙には、人はそれぞれの運命を持って生きて行く。うさぎのように跳んで生きて行く人もいれば、亀のようにゆっくり這って生きて行く人もある。どちらの生き方が幸せなのかは誰にもわからない。大事なのは、その生き方にどれだけ懸命に、ひたむきに生きたかによって決まる事、うさぎはうさぎ、亀は亀、亀はうさぎになりたいと思わない事、うさぎにはない亀の楽しみや喜びをみつけないと書いてありました。その言葉でようやく、ボクにも生きて行く自信が湧きました。それからはずつ元氣になり中学校も無事に卒業できました。

でも、同級生は就職も決まり、東京へ福島へと巣立っていったのに、ボクには将来の事が何も見えませ

ん。学校を卒業しても、体のハンディを消す事はできませんでした。暗く沈んでいた時、民生委員の人がきて、足の手術を受けてみたらと言われました。早速病院で診療してもらいました。先生の話では、蝸のような足に鉄板を入れて固定し、歩行訓練をすれば、松葉杖で歩けるようになるとの事、明るい光が見えてきたようです。手術の怖さ不安より、たとえ松葉杖でも早く歩きたい心が躍ります。

入院してみても初めて、障害を持っているのは自分だけではない事を知りました。それまでは、何故自分だけがと思っていたのですが、様々な障害の人と話をしてみると、みんな障害を乗り越えようと必死に頑張っている姿をみて、私も負けられないと思ったのです。平間さんが言った事は本当です。足ぐらいでよくよしてはいられません。約五カ月の入院で、ようやく松葉杖で歩けるようになりました。でも松葉杖で歩く事はみた目よりも大変です。平衡感覚が大事で、少しの段差にもつまずいてしまう。一歩一歩心を集中して歩く事は疲れる。何も考えずに歩き、走れたあの頃は、なんと幸せな頃だったでしょう。今になつてはじめて、健康とはあたりまえではなくかけがえのない事と気付くのです。

退院してからも毎日歩行練習です。三カ月、四カ月と歩いているうちに、足に力がつき自分の足だと感じるようになりました。

足にも自信がついた頃、知人の紹介で洋服店に見習いとして就職が決まり、家族みんなで喜びました。ここで頑張れば自立の道も拓ける。将来が少しだけみえてきました。

三年、四年と夢中で仕事を覚えてきましたが、段々思い通りにいかず悩みました。二級の障害を持つ者にとっては、社会の荒波は冷たく感じられ挫折もしました。そんな時、平間さんの所に行ってみようと

思ったのです。会ってみて驚きました。それまで波立っていた心が不思議と落ち着いてくるのです。必死に悩んでいた事がどうでもいい事のようにちっぽけに思えてきたのです。相談しているのは私の他に何人もいました。そして会いに行っているのです。みんな平間さんの顔をみると安心するのです。そして、もっと頑張ろうと思うのです。くじけそうになると、めがねの奥のやさしい目を思い出して歯をくいしばるのです。私の身体に杖が必要なように、心にも杖が必要だったのです。私の心の杖は平間さんです。

平間さんからは、そんなにあせるな、亀の歩みでいいんだよ。今はおいてけぼりでも、地面を這ってでも、休まず歩み続ければ今より前に進めるのだから、それで充分だよ。人生にゴールの旗はない。だからいくら速く走っても、ゆっくり歩いても同じ事、いやゆっくり人生だからこそ周りをみる事ができて、心に泌みる喜びを沢山みつけられるのだよと言われ、心新たに、仕事に精を出しました。仕事の壁を突き破ったようです。

見習いから十二年、私も二十九歳になり、ひと通りの技術を覚えて職人として働けるようになり経済的には自立できたのですが、何か物足りなく感じていました。今までの私は、誰かに勧められ、誰かに決められた事を誠実にやってきただけのように思えたのです。みんな受け身なのです。今度は、自分で決めて自分からつかみとる事だ。それができた時に精神的にも自立できた事になるだろうと考えて、東京に武者修行に出ようと決心しました。

店の旦那さんや周りの人に強く反対されましたが、でも今やらなければ、一生を中途はんばなまま生きて行く事になりそうに思えたので、逃げるように夜汽車に乗りました。今まで世話になった旦那さんに不

義理をしたという自責の念と、またまた家族に心配を掛けてしまった後悔とで心が重いが、自立の門出だ、弱音をはいてはいられない。

東京に着き誰にも頼らず、何にもない所から仕事をさがし部屋を借りた。今度の仕事は外国人（主にアメリカ兵）を相手とするテイラーで裁断と接客が私の役目です。ガラッと変わった東京の生活は、毎日が新しい。覚える事も多く、一日一日が戦っている充実感がある。夜は英語辞典に四苦八苦、せんべい布団にくるまって空が明るくなるのも忘れて勉強しました。片言の単語を並べ、身振り手振りで客との応対。身も心も疲れ切っているのに楽しいのは、自分が変わって行くのがわかるからだろう。自分でも驚く程明るくなっていきました。

今までは障害者として生きて行くのには、一步も二歩もさがってひかえ目に、まじめにコツコツと働き、話をする時も悲壮感みたいなものを持ち、考え方も四角ばって粹からはみださないように気をつけていました。だから人との付き合いも重苦しく感じていました。相手もそう思った事でしょう。それが障害を持った者の上手な生き方だと思っていたのです。

でも今は考えが変わりました。障害者だって明るく生きればいいのです。いや、障害者だからこそ明るく生きてゆかなければいけないのです。ここでは、白人も黒人も障害者もお互いの間には何のこだわりもないのです。これらは全部一人の個性として認めあっているのです。だから素顔の自分を出せるのです。ありのままを出して、あたり前に生きる。何と楽しい事でしょう。普段の日は精一杯仕事をし、休日はい切って遊ぶ、そんな生活であつという間に二年が過ぎました。

当初の目的である本当の意味の自立に自信もできました。自分で考えていたよりも、一人で生きて行く力があつたのです。これからは周りの人や社会から守ってもらって生きるのではなく、社会に貢献する人になるのです。上京する時はカラッポだったバッグに「自信」を一杯つめこんで田舎に帰る事にしました。久し振りに帰った田舎は前よりも楽しい。友と酒をくみかわし思い出話に花が咲く。

「おまえ変わったな。明るくなって話をしている、こっちも楽しくなるよ」

「前は暗くて打ちとけなかったよ」

等と友は言った。みんな私の足の事で気を使っていたのでした。自分が変われば、周りの環境も変わる。これからは、障害者に選ばれた者として生きようと心に誓いました。

運命のいたずらで、障害を受けた者は、その障害を乗り越えられる力のある人のみが受けるのです。私も選ばれたのだから、それを乗り越える力があつたのだと思う。そして乗り越えた今、平凡に生きた人よりも、喜びは大きい。自分の痛さが身に泌みた分、他人の痛さも良くなるようになりました。苦しみが多かった分、喜びも多いし、他人にも優しくできるのです。障害を体の真ん中にでんとすえて生きる。人に頼るのではなく、自分が光輝いて生きれば、自然と周りも明るくなるのです。何事も前向きに考えるようになりました。

それからは、福島でも超一流の洋服店に就職も決まり生活も安定し、友の紹介で結婚をし、長女誕生と次々に嬉しい事が続きました。亀の如くのろい歩みで五十年、障害者に選ばれて四十年、山あり谷ありの人生ですが、洋服仕立の技術で社会の一員として自立し、精一杯の努力をすれば希望も生まれる事を身を

もって実践、自ら進んで顔も体も外に向けて生きてきました。体の一部の障害に、心まで駄目にはいけない。自分の心の持ち方一つで、可能も不可能になってしまいました。

現在娘は高校生、健やかに、優しさを心にいっぱいいつめて育てています。私のよき理解者の妻とともに手を取り、平凡でも充実した日々を送っています。

私の人生は人のやさしさに支えられて生きてきました。これもすばらしい出会いが沢山あったからできた事なのです。全く悔いのない人生ですが、心に残っている事が一つある。人は使命をおびて生きている。障害を持つ私が今も生きているのは、使命が残っているからだ。それは、心や体が病んでいる人に、私の生き様を通じて心に安らぎを与える事、心に灯りをともしてあげる事だと思う。小児マヒのように予防できるようになった病気もあるが、今の医学でも、どうしようもない難病や年々増え続ける交通事故、薬害、公害、自然災害等数えあげたらきりが無い程、心や体に後遺症を残す惨事が絶えない。それを補助する器具や設備は国や公の機関にお願いするとしても、心のケアは行政では、無理だと思う。きめ細かく、忍耐強く付き合いながら心の開くのを待つのだから、個々のボランティアに頼るしかないだろう。平間さんが私にして下さった事を、今度は私が誰かにお返ししたいのです。心の杖になりたいのです。同じ苦しみを味わった者として、体験を通じた心の叫びを聞いて欲しいのです。

今悩んでいる友よ、心の扉を少しだけ開きませんか。きっと今日より明るい明日がみえてきますよ。

須田一輔
昭和十六年生まれ 洋服仕立業
千九六〇 福島県福島市

選評

私たちは、戦後滋賀県に近江学園を創設された故糸賀一雄先生の言葉「この子らを世の光に」をモットーに障害をもつ子どもたちの教育にたずさわってきました。須田さんのこれまでの人生は、さまざまな困難と闘いながら、自らの力で自らを世の光たらしめようと努めた典型のように思いました。「人に頼るのではなく、自分が光り輝いて生きれば自然と周りも明るくなるのです」それにしても平間さんとの出会いは運命的でした。

(山口 薫)